

美しく生きる

上うえ廣ひろ榮えい治じ

女性にも男性にも、若い人にも老人にも、誰もが「美しい人」と感じる人がいます。挙措動作きよそどうさが美しい、言動がさわやかで美しい、風貌ふうぼうが穏やかで美しい、生きざまいきざまが潔いさぎよくて美しい、そんな人たちです。

そんな人たちに共通するところを踏襲たしやうすれば、誰でも「美しい人」になることができるのでしょうか。もちろんなれると、私は確信しています。現に、「美しい人」に変身することができた数多くの人を、私はこの眼で見えてきました。そして現在も、「美しい人」になりかけている人々、「美しい人」になるための一歩を踏み出した大勢の人たちを知っています。

では、あらためて、誰もがなれる「美しい人」とは、どんな人のことをいうのでしょうか。その人たちに共通するものとは何でしょうか。

かつて、といっても、もうはるか昔のことですが、「美しい人」といえば、その代表は「銀幕のヒロイン」と呼ばれていた人たちでした。

銀幕とは映画のスクリーンで、ヒロインは女主人公、つまり全盛期の映画界を代表する女優のことです。ただし、当時のスクリーンで活躍した女優たちのすべてが、そう呼ばれていたわけではありません。容姿の

美しさや演技の巧さうまからすれば、ヒロインよりも数段上だと思われる、ヒロインならざる女優たちも大勢いたように思います。

では、それらの女優とヒロインの違いは何かといえば、理由ははっきりしています。ヒロインと呼ばれるためには、誰もが期待する美質の多くを備えていなければならなかったのです。

忘恩、怠惰、悪意、悪口、狷介、増長、狭量、短気、不平不満、奢侈、吝嗇など、さしずめ「五つの誓」に反するようなものは、いずれもヒロインにふさわしくありませんでした。

すなわち、人を幻滅させるような欠点、人を鼻白はなしろませるような個性、ありふれた凡庸さなどは、微塵みじんもあつてはならず、まして過激な言動やスキャンダルなど、もつての外のことでした。

大多数が憧れるスターですから、奢おごらず気取らず、自然で親しみやすくなければなりません。とはいえ、すぐに手が届いてもいけません。一般人とはちよつと違うノーブルな雰囲気を漂わせ、いつも静かに温かく、つつましい微笑みを浮かべている……、それが銀幕のヒロインでした。

そんな人がいるわけがない、と言う人たちは当時もいました。どんなにきれいな女優でも、人間だからくしゃみもすれば、鼻もかむ、親しみやすい高貴さなんてあるはずがない、というのです。

たしかにそのとおりです。彼女たちの美質は映画会社が設定した造り物です。どのようであれば人気が出て、スターダムを維持できるのか、考え抜いた末の理想像です。そして、その美質を備えるべく教育され、そのとおりに振る舞うことができた女優たち、それが銀幕のヒロインたちでした。

では、彼女たちは不自然な造り物で、ほんとうは「美しい人」ではないのかというと、それは違います。たとえ人々の眼に触れる時と場にかぎってではあっても、彼女が「美しくあろう」と努力し、「美しい人」になりきっている間は、間違いなく「美しい人」であったのです。

そもそも私たち人間は万全の美質を備えて生まれてくるものではありません。どのような人間になるか、美しくなるか醜くなるかは、ほとんど後天的な経験や学習、意志によるものだと思います。人が育つ環境や努力によつて、立ち居振る舞いや考え方から、その姿形までが変わっていきます。

つまり、「美しい人」とは、何事であれ「美しくあろう」と強く希望して、実践努力を続けている人です。「美しくあろう」として、美しく発想し、美しく行動するから、その生き方は美しく、その人生もまた美しいのです。生き方や人生ばかりではありません。姿形や風貌までが美しくなっていくのです。

そして、その美しさを実現するためのノウハウが「朝の誓」五か条の実践であることは、もう皆様ご承知のとおりです。

私は最近、この「美しい」というキーワードをしばしば用いており、今後もこの言葉を倫理実践の大切な心構えとしていきたいと思つていますが、この考え方そのものは私が立てたものではなく、昭和二十九年に上梓された『明るい生活』の中で、すでに同じ意味のことを先師が書かれています。

先師はそこで、「純情は人を開き、人を成就せしめる。純情は倫理の初めであり、すべてであります」と喝破しました。また、純情が万行の基であるとも説明しています。

結論をいえば、この「純情」こそ、私のいう「美しくあろうとする意志」であり、「美しい心」と置き換えて読めば、よりわかりやすくなると思います。

「純情」とは、純粹で邪心のない心です。人間誰もが生まれながらに持っている「満ち足りたい、仕合わせになりたい」という素直な心だといつてもいいでしょう。人はみな、快適で楽しい気分になりたいと願うから、いろいろなことを行なうのです。「純情は万行の基である」とは、このことです。

また、人は仕合わせになりたいという素直な思い（純情）があるからこそ、善き行ないを選びます。邪な

心を捨てて、倫理を踏んで生きなければならぬと思うのです。

そして、倫理は、仕合わせになるためには過剰な欲望や無駄な思いなど、不自然な思いのすべてを捨てよと教えます。事実、倫理を実践すれば、必ず仕合わせが成就します。そして、倫理に沿って生きる人は、余計なことや無理なこと、不自然なことが一切ない、簡潔で清明な高い人格を実現します。

先師のいう「純情は人を開き、人を成就せしめる。純情は倫理の初めであり、すべてである」とは、そういうことです。

しかし、先師が「純情は倫理の初めであり、すべてである」と明言してから半世紀をはるかに過ぎました。世相も言葉の意味も驚くほど変わってきました。「純情」も例外ではありません。多様な価値観がよしとされ、個性が尊重される風潮の中で、素直に仕合わせを求める「純情」を、単純で幼く未熟な心だと侮蔑するような傾向も出てきました。

今では、「君は純情だねえ」と言われると、素直で純粹な発想に感心している一方で、どこかで、君は世間知らずで幼くて単純だねえと揶揄やゆされているような気分になってきます。

そこで、不純なものや無駄なもの、邪なものや不自然なものを一切排除した、簡潔で清明な心、「倫理の初めであり、すべてである」心を表わす言葉として、私は「美しい」を選んだのです。

私たちは、日々を「美しく生きよう」と思い立つたところから倫理の王道を歩みはじめます。そして、立ち居振る舞いから言動、折に触れての発想まで、すべてを「美しい」ものにするので、「より美しい」人格になってゆくのです。故に、「より美しく」と思う心は、「倫理の初めであり、すべて」なのです。